

久万林業



目 次

1 久万林業とは？	1
2 久万林業地の自然条件	1
3 久万林業の現況	2
4 久万林業の歴史	4
(1)藩政時代	4
(2)久万林業の先駆者「井部 栄範 翁」	4
(3)大正時代 ～ 第二次大戦前	5
(4)第二次大戦 戦中～戦後	5
(5)林業総合調査と上浮穴林業振興協議会の設立	6
(6)上浮穴地方育林技術体系の策定	6
(7)枝打ち技術の普及	8
(8)複層林施業	8
(9)久万林業を育てた篤林家	8
(10)久万林業まつり	10
5 久万広域森林組合	10
(1)久万広域森林組合の概要	11
(2)久万林業活性化プロジェクト及び提案型集約化施業の取り組み	11
(3)父野川事業所	12
(4)久万事業所	12
6 久万高原町の原木市場	13
7 その他の林業事業体の動向	13
8 久万高原町の木造建築物	14
9 森林認証の取組	16
10 久万林業関係組織と連絡先	18



「すぎぼう」
上浮穴林材業振興会議
イメージキャラクター

1 久万林業とは？

「久万林業」とは、愛媛県の中南部、松山市から高知市に至る国道33号線沿いの仁淀川源流域、久万高原町において営まれている林業をいう。

かつては、旧久万町における林業を指していた時代や、旧小田町（現内子町）を含めて呼称していた時代もあったが、平成16年8月1日の町村合併（旧久万町、旧面河村、旧美川村、旧柳谷村）で久万高原町が発足して以降は、久万高原町における林業を「久万林業」と呼んでいる。



2 久万林業地の自然条件

この地域は、標高が約240mから1,982m（西日本最高峰である石鎚山頂）に及び、四国山地の1,000mを超える山々に屏風状に囲まれた地域で、急傾斜地が多く、高知県に流れる仁淀川の源流域を構成している。【表－1】

地質は、東西にほぼ平行して縦走する中央構造線、御荷鉾構造線及び仏像構造線に挟まれていて、三波川帯と秩父帯に区分される。これらの地質はいずれも剥離性に富む脆弱な地質であり、局部的に破碎帯が存在し、地すべり性崩壊の多発地となっている。これらの基岩を母材とする森林の土壌は、肥沃な褐色森林土が多く、林木の生育に適しており、気候は四国の中では冷涼多雨な気候となっている。【表－2、3】

表－1

単位：ha

森林の傾斜区分	15 度未満	15 ～ 30 度未満	30 度以上	計
	480ha (1.1%)	16,574ha (38.4%)	26,085ha (60.5%)	43,138ha (100.0%)

表－2

気温	平 均	最高気温		最低気温	
		年	℃	年	℃
	12.9℃	2013	35.6	1983	－ 13.6

表－3

降水量	年間降水量 平 均	日最大		1 時間最大	
		年	mm	年	mm
	2,151mm	2004 2005	265	2017	53.5

*観測場所：久万高原町入野（経緯 33 度 39.8 分、緯度 132 度 53.7 分、標高 511 m）

*平均気温・平均降水量については、H 25 ～ H 29 の 5 ヶ年平均値

3 久万林業の現況

久万高原町は、林野率が90%、民有林の人工林率が86%と非常に高く、この人工林のうちスギの占める割合が約70%と高いことが特色である。【表－4】

林業の盛んな同町においても、戦後の積極的な造林事業により形成された森林は、成熟期を迎えているが、森林所有の零細性や木材価格の長期低迷等により、間伐等の森林整備がされないまま放置される森林が増加していた。【表－5、6】

しかし、平成17年度から始まった「久万林業活性化プロジェクト」での安定的な森林施業の発注により、減少の一途であった林業就業者数は一定数を維持し、高性能林業機械の導入も進んだことで、横這いから減少傾向にあった素材生産量は増加し、町内3市場における原木取扱量も増加している。【表－7～10】

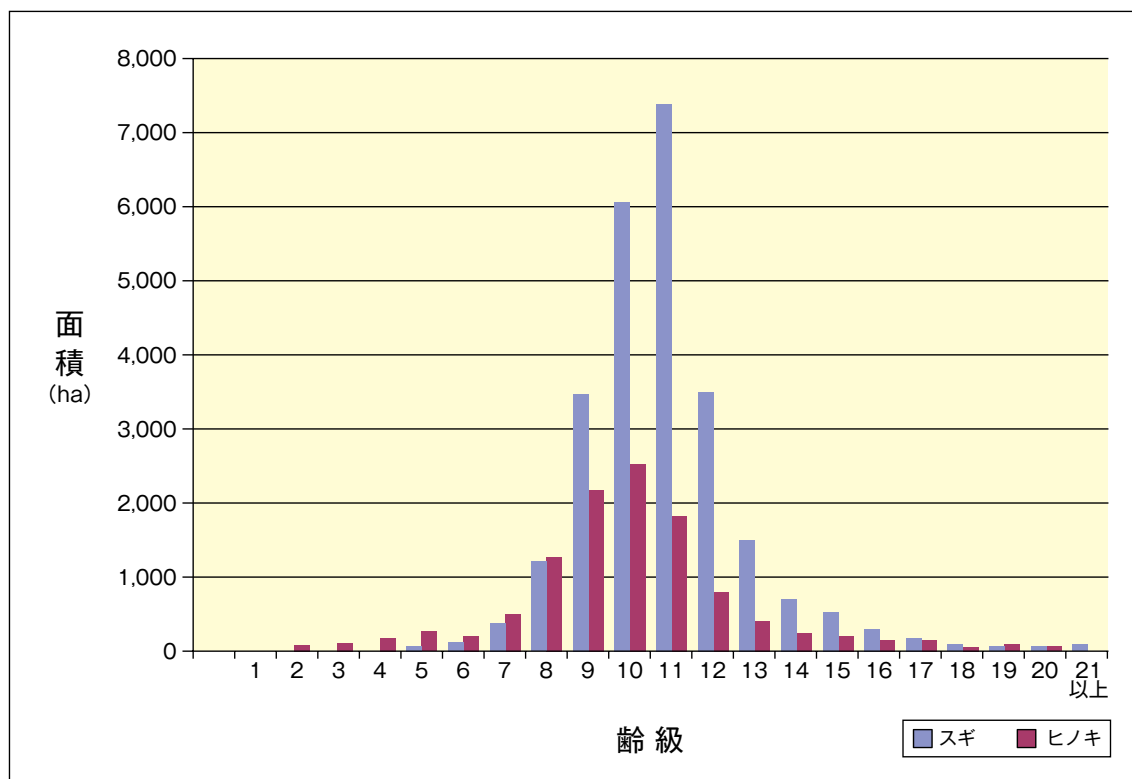
表－4 森林面積

単位：ha

土地面積	森林面積								
		民有林（5条）							国有林
		人工林					天然林等		
			マツ	スギ	ヒノキ	その他			
58,369	52,477 土地面積の 89.9%	43,150 森林面積の 82.2%	36,017 民有林面積の 83.5%	140 人工林面積の 0.4%	24,460 人工林面積の 67.9%	11,164 人工林面積の 31.0%	253 人工林面積の 0.7%	7,101	9,326

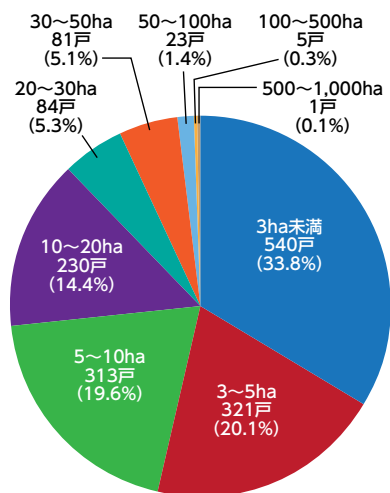
*「中予山岳地域森林計画」による。

表－5 スギ・ヒノキ齢級別面積



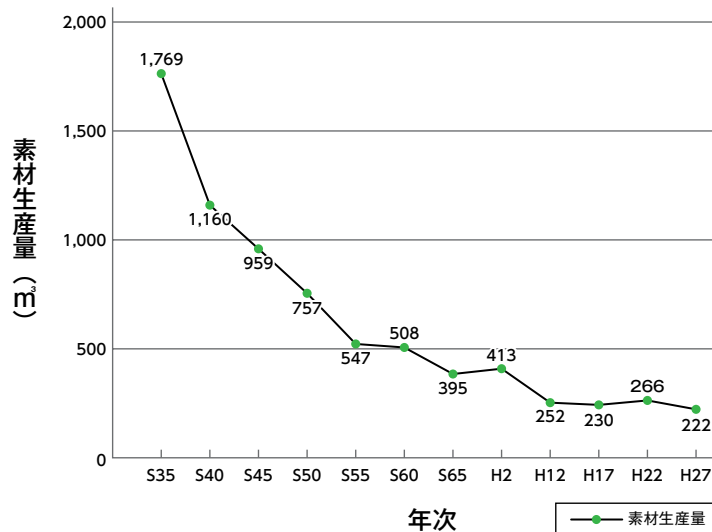
*「中予山岳地域森林計画」による。

表－６ 保有山林面積規模別林家数



保有山林面積規模別林家数

表－７ 林業就業者数の推移

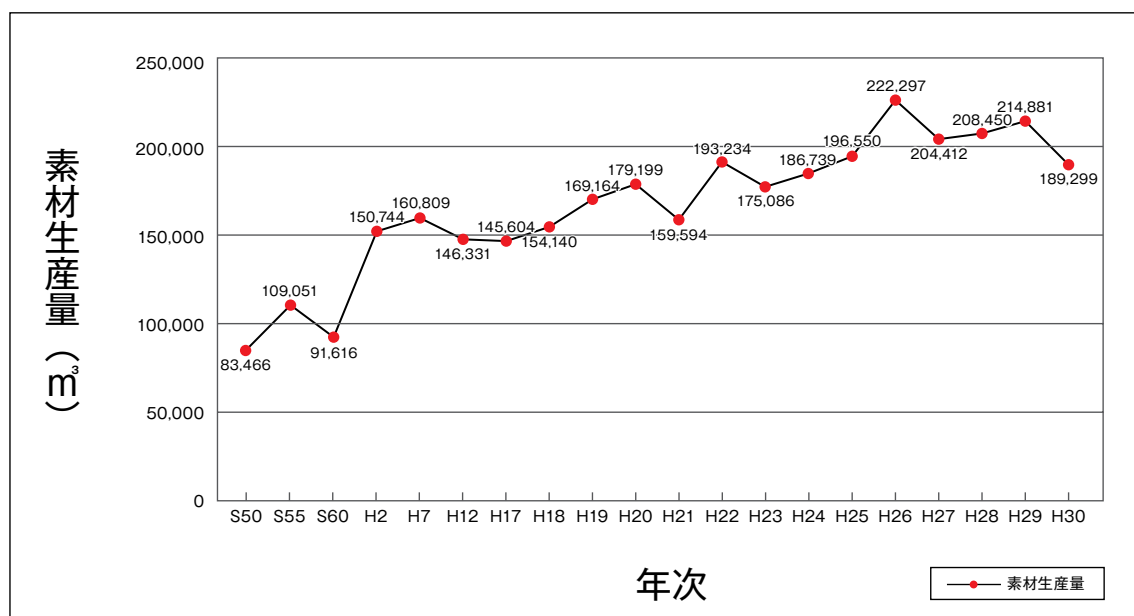


表－８ 高性能林業機械導入状況

単位：台

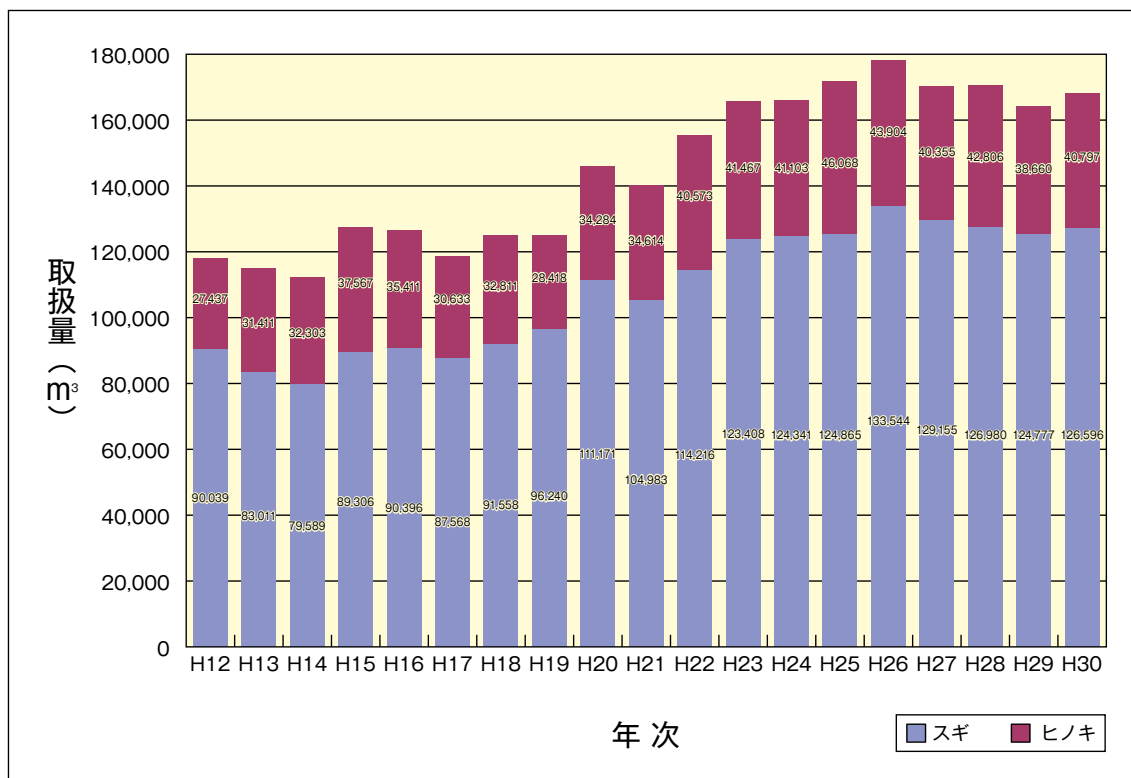
機種	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29
プロセッサ	8	10	10	8	9	9	9	13	13	13	14	19	20
ハーベスタ	2	4	3	9	12	14	17	19	17	17	18	16	15
フォワーダ		9	6	16	23	34	40	46	50	52	28	27	37
タワーヤーダ	2	2	2	2	0	1	1	1	1	1	1	1	2
スイングヤーダ		1	0	0	3	3	3	2	2	2	2	2	3
その他の高性能林業機械			1	2	3	3	4	5	7	7	6	6	8
計	12	26	22	37	50	64	74	86	90	92	69	71	85

表－９ 民有林素材生産量



*「愛媛県木材需給関係資料」による。

表－10 町内の原木市場における原木取扱量



4 久万林業の歴史

(1) 藩政時代

江戸時代には、松山藩の御林山として畑野川地区の遅越山・新開山などを中心に、囚人や農民を使って大面積にわたる植林を行い、御山奉行を置いて森林の管理を行っていた。

しかし、明治に入って藩有林は国有林に移管され、森林の大部分は大正末期から戦時中にかけて伐採されたため、旧藩時代に植林されたものは、現在ではわずかしが残っていない。

旧藩時代の植林は、藩による部分的なものであり、地元民一般への広がりには至らなかった。

(2) 久万林業の先駆者「井部栄範 翁」

明治5年、久万山の大宝寺の執事として来住した井部栄範（いべえいはん[還俗後：よしのり]和歌山市生まれ、1842～1914）翁は、明治維新により朝廷からの寺禄を廃止され、さらには明治7年の火災により焼失した大宝寺の再興を図るため、還俗して植林事業に着手し、自ら植林を行うとともに、地元住民に植林の有用性を啓蒙し、奨励した。

明治12年に菅生村の戸長に就任すると、同年5月の村議会で、村内すべての家庭が毎年スギ苗200本以上植栽することとした「村内全戸杉苗植込案」を可決し、土地のない村民には共有林を提供し、苗木代のない村民には苗木を無料で配布するなど、植林を普及奨励した。



井部 栄範 翁

(参考) 明治 12 年 5 月村会決議

勸業の事は物産を盛大にする御趣意にして、縷々御布告の趣も有之と雖も今俄に其方法を立つるに資金なくなお荏苒とすれば物産成育する期なく依て本年を始めとして村内戸毎に一箇年に杉苗二百本以上を必ず植込むものとし左すれば、概略村内人戸百五十戸として一ヶ年一家二百本を植れば木数三万本、十ヶ年間則三十万本之を年々植込せば数十年の後一家の予備にして後年子孫に幸福を与うるものなれば勉めて施行の方法を立つるものとす。

但、困窮にして其土地もなく植え場差支ゆるものは村内共有山を当り植込むものとす。此場合に於いては予て後年紛乱生ぜざる様定約書を取換せ仮写し一通は留置ものとす。

貧困にして苗代の力に及ばざるは苗代を貸与うる願或は苗を有志者より無代価にて相渡し其植込む木数の幾分を苗主に備えるものとす。

此場合に於ても堅く定約書を取換すは前条の如し。

当時、大宝寺住職であった木島堅洲僧正は、奈良県の吉野林業地方での経歴が長く、その影響もあったか、栄範翁は植林事業を推進するに当たって使用する苗木を、当初、吉野地方から直接購入していた。しかし、苗木の輸送に長期間を要し、山への活着率が低かったため、広島方面から調達するに至ったようである。

明治 12 年頃からは、吉野スギの種子を取り寄せて地元で養苗に着手し、失敗を重ねながら、明治 20 年代になって軌道に乗り始めたと言われている。

栄範翁個人の植林事業は、困難を極めながらも長期計画のもとに大規模展開し、亡くなるまでの 40 年間に約 40 万本を植林し、今日の久万造林株式会社の基礎を築いた。

(3) 大正時代 ～ 第二次大戦前

大正期から第二次大戦前の久万地方では、一部の資産家や熱心な林業家によりスギの造林が行われていた程度で、多くの山林は、主に肥料用の採草地や、屋根材の萱刈場として利用されていた。

しかし、井部栄範翁の奨励により古くから植林が行われていた菅生や中野村では、一部篤林家が昭和の初め頃から枝打ちを行い、無節柱材や磨丸太を生産販売していたといわれている。

(4) 第二次大戦 戦中～戦後

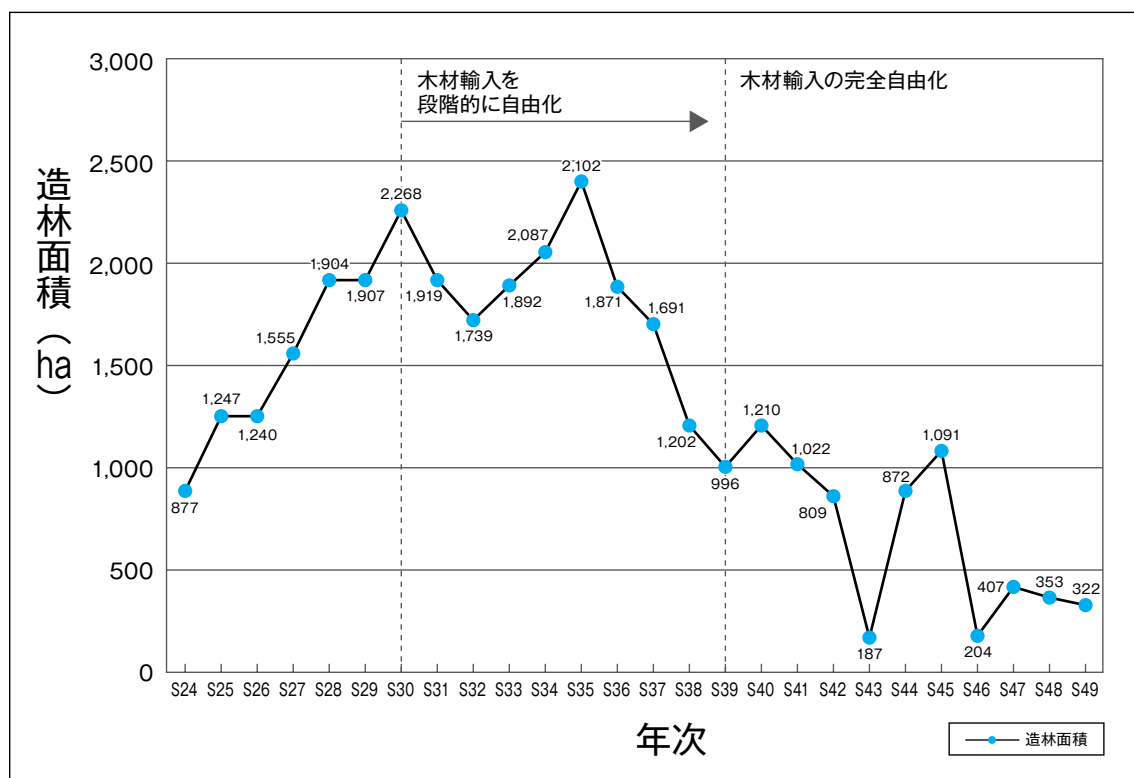
昭和 16 年に第二次大戦が勃発して以降、当林業地の森林においても戦時中は軍需用材として極度の濫伐を強いられ、また戦後も復興のため木材は生活必需物資として過伐・増産を余儀なくされた。

一方、人手不足・資材不足で造林事業は停滞したため、森林は荒廃の一途をたどった。

その後、戦後の木材需要の急増による価格高騰と燃料革命を背景に、政府は積極的な拡大造林政策をとったため、いわゆる「造林ブーム」が起こり、昭和 25 年頃からスギ・ヒノキの植林面積が飛躍的に増大した。【表－ 11】

しかし、昭和 30 年代、木材需要を賄うために木材輸入自由化が段階的にすすめられ、昭和 39 年には全面自由化されたことや、地域内の造林可能地はほとんど植栽されたことにより、植林面積は昭和 35 年頃をピークに減少している。

表－11 上浮穴郡（旧小田町を含む）における造林実績



*「愛媛県林業統計資料」による。

(5) 林業総合調査と上浮穴林業振興協議会の設立

昭和 34 年に旧久万町・川瀬村・父二峰村が合併して発足した新久万町は、独自の林業振興の方向を模索するために「林業総合調査」を昭和 37～38 年に愛媛大学農学部林学科 5 研究室に委託して実施した。

その結果、市場占有率を高め有利に販売するためには、均質材の大量生産体制整備が必要であり、さらに全体の 90% を占める所有規模 10ha 以下の零細規模林家については、短伐期による生産方法を取ることを方針に、次の二つの地域林業の経営方針が提案された。

方針 1：均質かつ優良な小丸太材を大量生産する。

方針 2：極めて形質の良い大径材を生産する。

県林業課では、久万林業の基本的な経営方針が出された事を受け、昭和 41 年にその推進母体として上浮穴郡林業振興協議会（現：上浮穴林材業振興会議）を発足させた。協議会の構成員は、町村長、町村議会議長、各森林組合長等であり、林業課が事務局を担当した。

事務局を担うこととなった県林業課では、林業経営の具体的な指導要領の編纂に取り組み、「優良小丸太生産と枝打ちについて」「上浮穴地方育林技術とその体系」「枝打技術と実際」を刊行し、均質優良小丸太材生産の実践指導を展開した。

(6) 上浮穴地方育林技術体系の策定

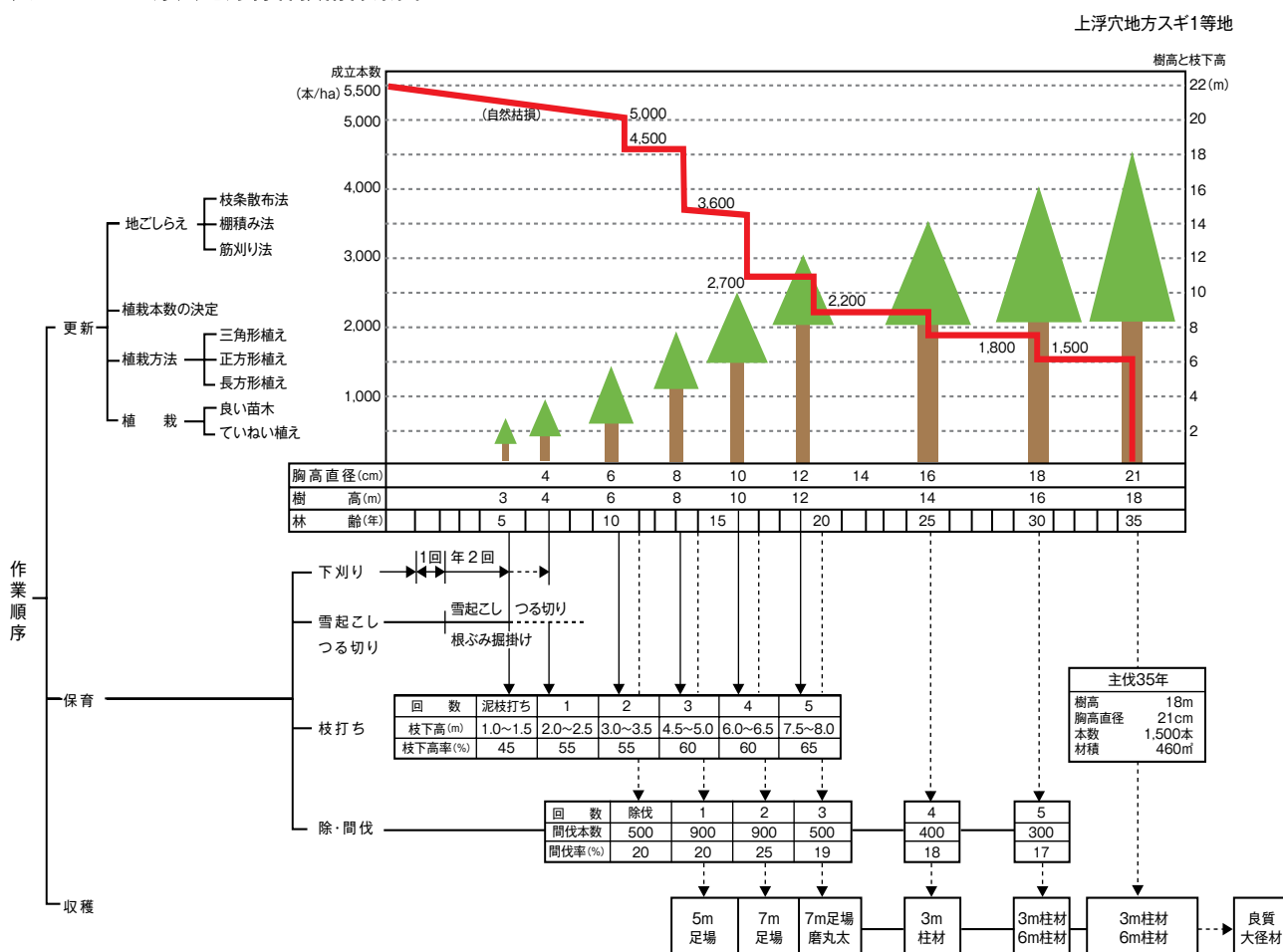
上浮穴郡林業振興協議会では、均質優良小丸太材を大量生産するためには、地域が一体として取り組む必要があることから、学識経験者、森林組合、篤林家などの地元林業関係者からなる研究会を設け、

検討・協議を重ねた末、昭和 44 年 3 月に全国的に注目を浴びた「上浮穴地方育林技術体系」を策定した。

また、その後約 20 年が経過し、林業をとりまく情勢が大きく変化し、無節材が以前のように有利販売できなくなったことを受け、2 番玉からも丸みの無いカネ角の柱を採るために伐期を延長し、またそれに伴い、枝打ち時期及び回数、間伐の回数等をそれぞれ見直して、昭和 63 年 3 月に次の通り改正している。【表－ 12】

	改 正 前	改 正 後
生産目標	10.5cm 角 3m 柱用原木 (1 本の木より 2 玉採り)	10.5cm 角柱用原木 (1 本の木より 2 玉採り)
伐 期	25 ～ 30 年	35 年
樹 高	16m	18m
胸高直径	18cm	21cm
伐採本数	2,000 本 /ha	1,500 本 /ha
材 積	400m ³ /ha	460m ³ /ha

表－ 12 上浮穴地方育林技術体系図



(7) 枝打ち技術の普及

当林業地における枝打ちは、大正から昭和初期に、秋本家（菅生）、岡家（下畑野川）や相原家（菅生）などの一部篤林家を中心に行われていたが、組織的な枝打ちが広がったのは、均質優良小丸太材の主産地化の方針が打ち出されて以降である。

県林業課では、均質優良小丸太材の生産のためには枝打ちが必要であるとして、講師に岡氏など枝打ちに経験のある篤林家を動員し、地区毎に森林所有者を対象とした「枝打ち巡回研修会」を実施した。

併せて、上浮穴林業振興協議会において、森林組合の労務班など実際に作業を行う労務者の技術向上を図るために「枝打技術士」の認定制度を設け、枝打ち技術者の育成に努めた。

これらの施策により、枝打ちによる優良材生産は地域全体に急速に普及していった。

(8) 複層林施業

当林業地では、小規模零細な森林所有者による短伐期での皆伐が繰り返されており、大径材の生産は困難であった。大正中期頃から、一部の林業家において自宅の新築用内装材等を主な用途として、沢沿いなどに大径木を保残木として残しつつ、その下層に植栽する取組が始まり、結果として複層林が形成されていた。

昭和 30 年代に入ると、3～5 回の間伐による優良大径材と、間伐により空いた隙間に下層木を植栽し、小丸太材も併せて生産することを目的とした積極的な複層林造成が一部篤林家を中心に行われるようになった。

昭和 40 年代になると、これが地域内に次第に波及し、その結果、現在 200ha 程度の複層林が造成されている。

(9) 久万林業を育てた篤林家

① 岡 家

岡家の林業経営は、現当主の信一氏の曾祖父である小八氏が、井部栄範翁の影響を受け、雑貨商を営みながら、その利益をもって山林を取得し、毎年 1 万本の植栽を 10 年間継続し、累計 10 万本の植林により今日の基礎を築いたといわれている。

また、祖父の重衛氏は、良材生産を目的に他に先駆けて枝打ちを始め、父親の譲氏は、その枝打ち材を利用した磨丸太の開発や二段林仕立て、台杉仕立てに取り組むなど積極的に新しい林業技術の開発導入を進めた。

岡家の育林技術は、新興林業地である久万林業の成立に、その礎として深く関わっており、昭和 43 年に策定された「久万地方育林技術体系」は、岡家の施業技術をモデルとして確立されたものである。その体系は、その後、県下はもとより全国に波及し、育林施業技術の基礎となっている。

譲氏は、昭和 37 年度の第 1 回農林水産祭参加林業経営推奨行事において「農林水産大臣賞」を受賞しており、信一氏も平成 12 年度に第 39 回の同推奨行事において「農林水産大臣賞」を受賞している。

(参考) 岡氏の千本山複層林の概要

- ① 所在地：久万高原町下畑野川千本高原
- ② 面積：2.18ha
- ③ 樹 齢：140 年生（上層木、2019 年現在）
- ④ 複層林造成の経緯

明治 13 年、岡家では、井部 栄範翁から譲り受けた吉野系の苗木の植栽を行い、他に先駆けて枝打ちによる良質材生産に取り組み、択伐による木材生産を実施してきた。昭和 39 年に 85 年生となっていた立木の 36%を伐採し、翌 40 年春に、4,200 本/ha のスギ苗木（ヤナセスギ、サンプスギ、在来実生スギ）を植栽して二段林とした。その後、下記のとおり択伐と植栽を繰り返し、複層林に移行している。

単位：本

実施年 (林齢)	上層木伐採			下層 木植栽 (本/ha)
	伐採前	伐採(%)	伐採後	
S50(96)	431	151(35)	280	
S51				1,129
S58 (104)	252	81(32)	171	
S59				886
S62				271
H 1				271
H 3(112)	170	48(28)	122	
H10(119)	122	24(20)	98	
H18(127)	80	16(20)	64	



② 秋本 家

秋本家の富十郎氏は、井部栄範翁とともに植林事業の推進に努め、菅生村共有林 150ha を借地し、村民に分割して植林事業を指導奨励した。富十郎氏の次男半次郎氏は、息子の富栄氏と共に枝打用鉋の改良をすすめ、今日の秋本式鉋を完成し、枝打ち技術の普及に貢献した。富栄氏の息子の保氏は父とともに枝打鉋や木登り器などの開発・改良を進め、県下一円において優良材生産の普及指導に力をそそぎ、地域の林業経営改善、後継者の育成などに活躍し、昭和 44 年度第 8 回農林水産祭参加林業経営推奨行事において「農林水産大臣賞」を受賞している。

③ 相原 家

相原家の林業は、現当主である誠一氏の曾祖父である紋蔵氏が、明治初期にやはり井部栄範翁から苗木を譲り受けて植林したことから始まる。祖父の愛蔵氏の代には既に枝打ちを行い、父の佐加雄氏は小面積の所有森林における林業経営を模索するために、「量より質」の木材生産をめざして集約管理を行い、磨き丸太や無節柱材を生産した。また、林業後継者を育成するために、県内外からの研修生を家庭に受け入れ、卓越した技術を全国に広め、昭和 45 年度第 9 回農林水産祭参加林業経営推奨行事において「農林水産大臣賞」を受賞している。

(10) 久万林業まつり

上浮穴林材業振興協議会は、郡民の林業生産意欲を高揚し、内外に久万林業を紹介するために、昭和46年から毎年10月中旬に久万町森林組合構内を主会場に「久万林業まつり」（第1回は「上浮穴林業大会」と称した。）を開催し、優良製材品、磨丸太、緑化樹等の展示即売や林業関連資料の展示、郷土物産販売、ふるさと食堂、のど自慢や郷土芸能発表等盛りだくさんの内容で、全国から多数の参観者を迎える一大イベントとなった。

昭和58年からは久万町が主催者となり、林業のみでなく、地場産業の振興をテーマとする新しいイベントとして地域に定着し、昭和59年には「愛媛のまつり50選」に選ばれた。

また、久万林業まつりの内容拡充に伴い森林組合構内では手狭となったことから、昭和61年からは主会場を久万公園に移し、年々盛会に開催されている。



▲令和元年 第49回林業まつりの状況

5 久万広域森林組合

バブル経済が崩壊し急激に景気が後退する中で、平成10年に広域合併（久万町森林組合、面河村森林組合、美川村森林組合、柳谷村森林組合、小田町森林組合）して発足した久万広域森林組合は、木材価格の低迷や製材品の需要減退など厳しい経営環境の中での船出となり、平成12年度末に約52億円の事業費を要して完成した大規模加工施設（父野川事業所）等の加工部門の不振もあって、設立以来毎期のように欠損金を生じ、平成17年度末には2億円を超える累積欠損金を計上した。さらには、小田地区組合員の内子町森林組合への移転に伴い、出資金が1億円以上も減少したこともあって、危機的な経営状況に陥った。

組合では、この危機的状況にある経営の再建に向けて、平成14年12月に上浮穴郡内の県議会議員、町村長等からなる「久万広域森林組合構造改革検討委員会」を組織し、翌年3月にはその検討結果を報告書にとりまとめ、本格的な改革の推進に取り組んだ。さらに、第1期「中期経営計画（H18～21年度）」により、収支改善や人材育成に努めた結果、平成18年度には単年度黒字を達成し、翌19年度には累積欠損金の解消にも成功した。

現在、第4期「中期経営計画（H29～R3年度）」を策定し、「組合員のための組合」の意識を常に持ち経営管理を徹底し取り組んでいる。平成29年度に降雨や大雪が影響し赤字決算となったが、役職員の努力もあり翌年度以降、黒字決算となっている。今後、全国的な問題である森林環境の維持管理にも行政と連携して取り組み、森林資源の有効活用を目標に組合運営を推進している。

(1) 久万広域森林組合の概要（令和2年2月1日現在）

○所在地	上浮穴郡久万高原町久万 265 番地 3																		
○組合長	板崎 鳴海																		
○組合員数	3,394 人（正組合員数：3,250 人、准組合員数：144 人）																		
○出資金	480,848 千円																		
○役員数	20 名（常勤理事：2 名、非常勤理事：14 名、監事：4 名）																		
○職員数	109 名																		
○主な組織	<table border="0"> <tr> <td>総務部</td><td></td></tr> <tr> <td>森林部</td><td> <table border="0"> <tr> <td>森林整備課</td><td>植林や間伐等の森林整備を実施</td></tr> <tr> <td>森林プロジェクト課</td><td>久万林業活性化プロジェクトの推進</td></tr> <tr> <td>木材市場</td><td>出荷された原木の市売りを実施</td></tr> </table> </td></tr> <tr> <td>事業部</td><td> <table border="0"> <tr> <td>父野川事業所</td><td>間柱・ラミナ・集成材等の生産</td></tr> <tr> <td>久万事業所</td><td>スギ、ヒノキの柱・平角製品の生産</td></tr> </table> </td></tr> <tr> <td>活性化センター</td><td>団地化による森林の管理の推進</td></tr> </table>	総務部		森林部	<table border="0"> <tr> <td>森林整備課</td><td>植林や間伐等の森林整備を実施</td></tr> <tr> <td>森林プロジェクト課</td><td>久万林業活性化プロジェクトの推進</td></tr> <tr> <td>木材市場</td><td>出荷された原木の市売りを実施</td></tr> </table>	森林整備課	植林や間伐等の森林整備を実施	森林プロジェクト課	久万林業活性化プロジェクトの推進	木材市場	出荷された原木の市売りを実施	事業部	<table border="0"> <tr> <td>父野川事業所</td><td>間柱・ラミナ・集成材等の生産</td></tr> <tr> <td>久万事業所</td><td>スギ、ヒノキの柱・平角製品の生産</td></tr> </table>	父野川事業所	間柱・ラミナ・集成材等の生産	久万事業所	スギ、ヒノキの柱・平角製品の生産	活性化センター	団地化による森林の管理の推進
総務部																			
森林部	<table border="0"> <tr> <td>森林整備課</td><td>植林や間伐等の森林整備を実施</td></tr> <tr> <td>森林プロジェクト課</td><td>久万林業活性化プロジェクトの推進</td></tr> <tr> <td>木材市場</td><td>出荷された原木の市売りを実施</td></tr> </table>	森林整備課	植林や間伐等の森林整備を実施	森林プロジェクト課	久万林業活性化プロジェクトの推進	木材市場	出荷された原木の市売りを実施												
森林整備課	植林や間伐等の森林整備を実施																		
森林プロジェクト課	久万林業活性化プロジェクトの推進																		
木材市場	出荷された原木の市売りを実施																		
事業部	<table border="0"> <tr> <td>父野川事業所</td><td>間柱・ラミナ・集成材等の生産</td></tr> <tr> <td>久万事業所</td><td>スギ、ヒノキの柱・平角製品の生産</td></tr> </table>	父野川事業所	間柱・ラミナ・集成材等の生産	久万事業所	スギ、ヒノキの柱・平角製品の生産														
父野川事業所	間柱・ラミナ・集成材等の生産																		
久万事業所	スギ、ヒノキの柱・平角製品の生産																		
活性化センター	団地化による森林の管理の推進																		
○事業量（平成 30 年度実績）	<table border="0"> <tr> <td>年商：15 億円</td><td>原木市場の取扱量：90,171m³</td></tr> <tr> <td>間伐面積：450ha</td><td>製材加工による原木消費量：72,900m³</td></tr> </table>	年商：15 億円	原木市場の取扱量：90,171m ³	間伐面積：450ha	製材加工による原木消費量：72,900m ³														
年商：15 億円	原木市場の取扱量：90,171m ³																		
間伐面積：450ha	製材加工による原木消費量：72,900m ³																		

(2) 久万林業活性化プロジェクト及び提案型集約化施業の取り組み

① 取り組みの背景

久万高原町は、民有林人工林率 84% を誇る全国有数の林業地である。この人工林は主として森林所有者により整備が行われていたが、森林所有者の高齢化や材価低迷により平成 10 年頃から素材生産量が低迷し始め、放置林等の問題が顕在化してきた。

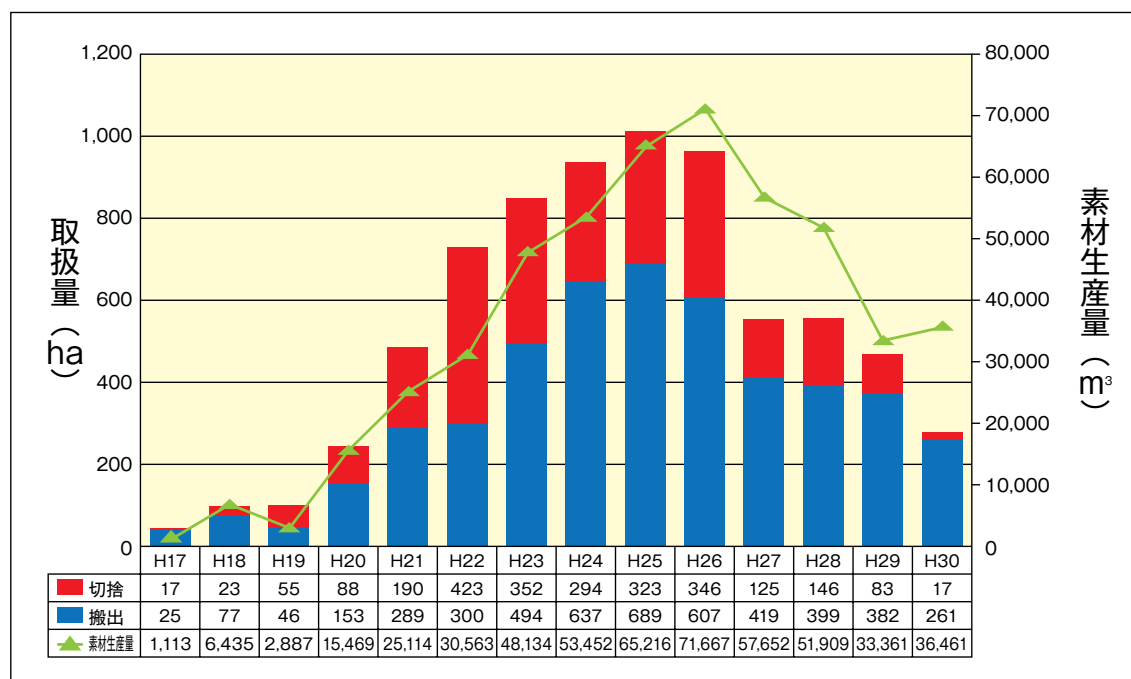
このため平成 16 年の町村合併を期に久万高原町、久万広域森林組合、その他林業関係団体等で組織する上浮穴林材業振興会議で林業活性化策を検討し、当時脚光を浴び始めた京都府日吉町森林組合の提案型集約化施業をモデルとした「久万林業活性化プロジェクト」を策定した。

② 取組状況

このプロジェクトは、森林組合に設置されていた「久万林業活性化センター」を中心に推進されていたが、現在は「森林プロジェクト課」として組合の課として活動している。このプロジェクトが他地域の提案型集約化施業と異なる点は、地域の雇用確保や地域経済活性化等の波及効果を目指し、集約化した施業を地域の林業事業体へ外注することである。このプロジェクトは平成 17 年度のスタートから平成 30 年度までの 14 年間で延べ 5,089ha の間伐を実施し、平成 30 年度では間伐実施面積 372ha、高性能林業機械等を利用した素材生産量は 33,575 m³ となっている。平成 26 年度には 1,000ha の間伐を実施したが、林業従事者の減少から年々施業面積は減少傾向にある。林業従事者の確保育成が課題となっている。

なお、久万高原町では、林業振興だけでなく、森林資源を活用した地域全体の振興策として取り組んでおり、プロジェクト立ち上げの時から町職員をこのセンターに常駐させているほか、県においても普及指導職員を駐在させており、これらの職員が連携して事業を推進している。

表ー 13 久万林業活性化プロジェクト実績



(3) 父野川事業所（大規模加工施設）

① 設立目的

- 平成 10 年 4 月に上浮穴郡内 2 町 3 村の森林組合が広域合併したことから、それまで各森林組合による小規模分散型であった製材加工施設を父野川に集約（平成 15 年度：美川事業所、柳谷事業所閉鎖 平成 16 年度：小田地区の製材、銘木、ログ事業所閉鎖）する。
- 当時比較的価値の低かったスギ中目材や曲がり材の有効利用による需要拡大を図る。
- 製材施設には材長の 2% 以下の矢高の曲がりに対応可能なカーブ製材システムを導入しているほか、乾燥施設の熱源にはバイオマスボイラーを整備し、工場内から排出されるバークかんな屑・端材等を燃料として有効利用する。
- 外材に負けない生産効率を有し、製品の全量を乾燥し、強度性能の検査・表示が可能な集成材や間柱を生産する。

② 開所時期 …………… 平成 13 年 4 月

③ 職員数 …………… 47 人（平成 31 年 4 月 1 日現在）

④ 平成 30 年度原木利用実績 …… 60,530 m³

⑤ 平成 30 年度製品生産実績 …… 22,670 m³

(4) 久万事業所

① 概要

- 優良材・良質材である久万材を製材品として付加価値の高い商品にする。
- 施設の特徴としては、4 面カンナ盤に直結したグレーディングマシンを整備しており、構造用製材（柱・土台・梁桁）の機械等級区分による管理をしている。

② 職員数 …………… 12 人（平成 31 年 4 月 1 日現在）

③ 平成 30 年度原木利用実績 …… 10,418 m³

④ 平成 30 年度製品生産実績 …… 4,908 m³

6 久万高原町の原木市場

四国は、全国でも特に原木市場の取扱量が多いエリアであり、久万高原町においても、民間の(株)久万木材市場、県森連の久万山木材市売場、森林組合の久万市場の3市場が経営しています。

3市場の合計で、毎年14万～17万m³程度の原木取扱量で推移しており、各市場がストックヤードの回転効率を上げたり、自ら素材生産にも取り組む等し、平成30年は初めて原木取扱量18万m³を超えました。【表-14】 【表-15】

表-14 久万高原町内3市場の原木取扱量【月間】

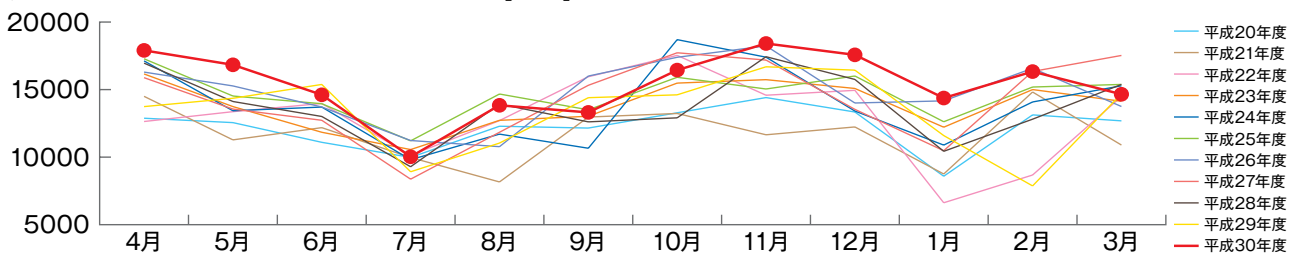
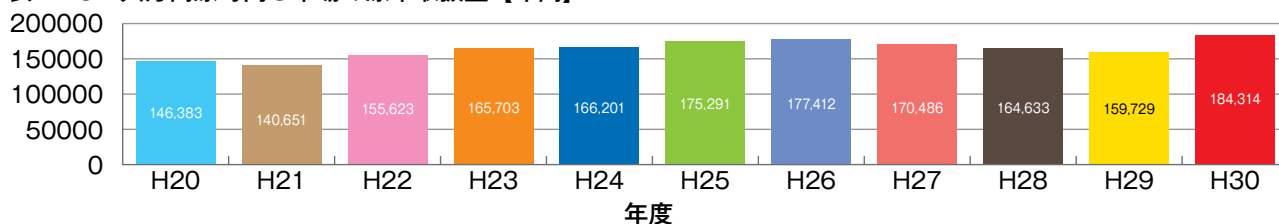


表-15 久万高原町内3市場の原木取扱量【年間】



7 その他の林業事業体の動向

久万高原町（旧久万町）では、安定的な木材供給体制の構築を図るため、平成2年全国初の第3セクター方式の林業会社として「株式会社 いぶき」を設立、現在は職員数30名程度の組織となり町内林業の主力事業体に成長しています。職員はUターン、Iターン者など林業新規参入者が多く、森林管理の実行者のみならず地域林業の担い手育成機関としても機能しています。

また、久万高原町内の認定林業事業体は、久万広域森林組合といぶきを除き18者登録されています。さらに、自伐林家や一人親方林業者など潜在的事業者は50者を超えています。潜在的事業者については、今後、久万林業の担い手として育成していく必要があり、県久万高原森林林業課では、2019年「自伐型林家連絡会」を2020年には「久万高原りんりんが～る連絡会」を立ち上げ、まずは最新技術や安全対策の情報伝達、会員相互の情報交換などを行い、将来は林業経営体へと育成していきます。



8

久万高原町の木造建築物

久万高原町では、全国有数の林業地であるということから、全国に先駆けて公共施設の木造化を推進し、新しく建築される学校や美術館等の公共施設は、全て地元の「久万材」を使用した木造建築となっている。

久万高原町内の主な木造建築

昭和63年7月完成



①久万美術館
(菅生 2-1442-7)

昭和63年6月完成



②畑野川小学校
(上畑野川甲 521)

平成2年3月完成



③みどり物産館
(菅生 2-1439-1)

平成2年3月完成



④愛媛県林業研究センター展示研修館
(菅生 280-38)

平成3年3月完成



⑤直瀬小学校
(直瀬甲 3974-3)

平成4年3月完成



⑥天体観測館「星天城」
(下畑野川乙 488)

平成6年3月完成



⑦久万高原駅やまなみ
(久万 202-3)

昭和58年12月完成



⑧明神小学校
(東明神甲 698-1)

平成9年7月完成



⑨町立図書館
(久万 1484-1)

久万高原町





9

森林認証の取組

久万高原町では、約18,000haもの森林について、一定の基準のもと適切に管理される森林・経営組織を認証するFM認証(Forest Management(森林管理))を取得しており、これらFM認証森林から生産された木材・製品へラベル付けをして適切に管理を行うこと認証するCoC認証(Chain of Custody(加工流通過程の管理))も、各流通段階において取得する等、森林認証材を供給できる体制が整備されている。【表－16】 【表－17】

表－16 FM 認証取得状況(久万高原町)

認証取得者	面積	取得年月日
久万広域森林組合	17,705ha	H28.121
久万造林(株)	228ha	
計	17,933ha	

(H31.4 現在)

表－17 CoC 認証取得状況(久万高原町)

認証取得者	原木市場	製材	取得年月日
久万広域森林組合	○	○	H29.1.1
(株)久万木材市場	○		
(有)長田相互製材所		○	

(H31.4 現在)

memo _____

久万林業関係組織名	所在地	TEL・FAX
①愛媛県中予地方局産業経済部久万高原森林林業課	〒791-1201 久万高原町久万571番地1	TEL : 0892-21-1265 FAX : 0892-21-1267
②愛媛県農林水産研究所林業研究センター	〒791-1205 久万高原町菅生2番耕地280の38	TEL : 0892-21-2266 FAX : 0892-21-3068
③久万高原町 林業戦略課	〒791-1201 久万高原町久万212番地	TEL : 0892-21-1111 FAX : 0892-21-2860
④久万広域森林組合	〒791-1201 久万高原町久万265番地3	
【本所】		TEL : 0892-21-1255 FAX : 0892-21-2710
【活性化センター】		TEL : 0892-50-0075 FAX : 0892-50-0081
【森林整備課】		TEL : 0892-50-0002 FAX : 0892-21-0900
【久万市場】（木材市場）	〒791-1211 久万高原町露峰乙2172番地	TEL : 0892-21-2613 FAX : 0892-21-2319
【久万事業所】（木材加工施設）	〒791-1205 久万高原町菅生2番耕地1526番地3	TEL : 0892-21-2611 FAX : 0892-21-2355
【父野川事業所】（木材加工施設）	〒791-1223 久万高原町父野川乙586番地3	TEL : 0892-50-1912 FAX : 0892-50-1913
⑤愛媛県森林組合連合会久万山木材市売場	〒791-1202 久万高原町入野 840 番 1	TEL : 0892-21-0516 FAX : 0892-21-2257
⑥上浮穴林材業振興会議 （事務局：愛媛県中予地方局産業経済部久万高原森林林業課）		
⑦中予山岳流域林業活性化センター （事務局：久万高原町林業戦略課）		
⑧上浮穴林研グループ連絡協議会 （事務局：愛媛県中予地方局産業経済部久万高原森林林業課）		

発行日：令和2年3月

発 行：上浮穴林材業振興会議

連絡先：愛媛県上浮穴郡久万高原町久万571番地1
（愛媛県中予地方局産業経済部久万高原森林林業課内）

TEL : 0892-21-1265 FAX : 0892-21-1267



「すぎぼう」
上浮穴林材業振興会議
イメージキャラクター

（参考文献）

岩水 豊 編著「久万林業 ―商品生産林業のすすめ―」
上浮穴郡久万町発行「久万町誌 増補改訂版」